

受入地域の小学校も含む交流に重点をおいた取り組み

金沢市立馬場ばば小学校

石川県金沢市東山3丁目9番30号
電話番号 076-251-7826
FAX番号 076-251-7827

全学級数	7学級（内特別支援学級1学級）
全児童数	115名
全教職員数	14人

活動地域と宿泊先

石川県七尾市能登島【受入組織：七尾市子ども農山漁村交流プロジェクト受入協議会】

→ 詳細は118ページ

地域名	宿泊施設
石川県七尾市能登島	家族旅行村
石川県七尾市能登島	民宿(2泊)

活動のねらい



- (1) 能登島の海や山での自然に関わる体験活動を通して、自然を大切にする心を育む。
- (2) 民宿の方や地元の小学生との交流活動を通して、人と関わり絆を深める。
- (3) 5, 6年の異学年が寝食を共にし活動することを通し、協力や思いやりの心、自立心を育む。

取り組み前の課題

- (1) 体験活動のねらいを明確にし、価値ある活動に絞るなどプログラムの精選をする。
- (2) その際「何をどこまで児童に任せるか、現地側に任せるか」など、現地指導者との綿密な打ち合わせが必要。また、打ち合わせに要する時間の確保も必要になる。

対象学年・児童数	5年生・17名、6年生・18名 ※児童数が少数であり、かつ5年生と6年生の関係が希薄であることから2学年合同実施とした。
実施時期	平成21年7月7日（火）～10日（金）

活動地域の選定で決め手となったポイント



施設の充実と海山そして田んぼと
バリエーションに富んだ環境



民宿との交流

活動の成果

- (1) 能登島の人たちとの交流を通して、人々との「絆」を深めることができた。
- (2) 宿泊体験活動以降、学校や家庭で進んであいさつや手伝いをするようになった。
- (3) 事後学習でみられた、俳句や報告会での表現力から、豊かな体験は豊かな表現力につながるということも実感できた。
- (4) 自然の中での3泊の長期体験活動の中での自己発見、友だち発見の効果だろうか、9月以降不登校の改善がみられた。

課題に対する解決策

- (1) 活動のねらいを明確化し、プログラムの精選に努める
- (2) 現地スタッフとの綿密な打ち合わせ

体験活動の実施体制

学校の指導（支援）体制

- (1) 4月の学級懇談会の折り、保護者に大まかなねらいや予定を知らせることで、保護者と宿泊体験学習の意義などを共有することができ、その後の協力も得られやすくなった。
※養護教諭が同行すること、受け入れに慣れた民宿にお世話になることなどを伝え、安全面を強調した説明を行った。
- (2) 安全で充実した活動にするために、校内支援委員会には、該当の5・6年担任だけでなく複数の学校職員、さらに、保護者やPTA、地域代表の方にも協力を依頼し、連携して取り組んだ。
- (3) 受け入れ地域の七尾市能登島は学校からバスで2時間もかかる。事前視察する余裕もなかったが、七尾市の担当者の方が窓口となり、学校と各施設等の交渉を進め、各活動に応じた指導者、支援者の確保もしていただくことができた。

配慮事項等（安全確保のための改善点、衛生上の留意点等）

安全確保

- (1) 民宿に分散し子どもだけで宿泊することに不安があったが、保護者の賛同も得て市や協議会を通じて民宿との事前打ち合わせをしっかりとし、緊急連絡体制（家庭と現地との連絡が取れる体制）を作り、臨むことができた。
- (2) 食物アレルギーのある子については、事前に民宿側に説明し、毎食別メニューにしてもらった。
- (3) 現地では、夜の安全把握のために、引率教師で民宿訪問をした。

衛生上の留意点

雨に濡れた活動の後には、お風呂の用意や履き物の乾燥、水分補給のためのお茶など細かな配慮を数多くしていただいた。

感想

保護者からの声

- (1) 家を離れての体験活動は、非常に楽しかったようで、さみしかったといわないのにびっくり。
- (2) 民宿の方とのふれ合い、温かさを笑顔で語ってくれ、貴重な人との関わりが収穫だ。



児童からの声

- (1) 児童の学んだこと ベスト3
 - ・ 5年生 ①能登島の人々の温かさ ②協力することの大切さ ③友達との絆の深まり
 - ・ 6年生 ①能登島の人々の温かさ ②海や山への親しみ、興味 ③思いやりの心の大切さ



(2) 成長した 変わったと思うこと

- ・ 5年生 ○協力するようになった ○友達や周りの人の大切さや感謝
- お手伝いするようになった ○自分でできることが増えた
- 挨拶をするようになった ○魚をさばけるようになった
- ・ 6年生 ○協力するようになった ○友達との絆が深まった
- 手伝いを進んでするようになった ○自分のことは自分でするようになった
- 家でも進んで挨拶するようになった



定置網荷捌き見学



そば打ち体験
(打ったそばで昼食)

実施までの経過

- 平成21年 5月 道徳による学習 (基本的生活習慣 自主自立 環境)
- 6月 学活 (自然や人との絆について話し合い)
- 学活 (活動の計画と準備)
- 7月 宿泊体験学習 (お礼状 作文 俳句作り)
- 9月 報告会 振り返り

活動内容

事前指導

5・6年生合同の集会では、**実行委員会を組織**し、七尾市能登島についての事前学習や、宿泊体験の目的、なんのための活動か、どんな活動をしたいかなどを話し合い、計画を進めた。

5年担任は社会科や総合の時間の学習との関連を意識し、「**田んぼのない馬場、能登島では実際の田を見、田を前にし、米作りに励む人から米作りの話を聞かせてもらおう。**」と指導した。

総合の時間で馬場のよさを学ぶ6年担任は「**能登島の良さをいっぱい見つけてこよう**」と指導した。

5年生、6年生とも 道徳1時間 学級活動4時間

日程

月日	行程
<p>1 日 目 (7 月 7 日)</p>	<p>里山散策 野鳥観察 巣箱設置 山野草採取 ※暑い中、鳥の声を聞きながら能登島小6年生と4km歩く 山の上で弁当 ○支援(講師):能登島スローライフ推進協議会 里山インストラクター 入村式 市や民宿関係者などとの対面式 ○支援:能登島観光対策室 火おこし体験 夕食準備・後片付け 薪集め 飯ごう炊飯カレー作り ○支援:生き活き工房ねねの会 きもだめし 泊:家族旅行村 ※盛り沢山の活動後、バンガローでゆっくり休む</p>
<p>2 日 目 (7 月 8 日)</p>	<p>魚飼育体験と海の生態学習 能登島水族館で裏側のエサ調理の仕事体験 ○支援:能登島水族館職員 スノーケリング体験 ※海中を覗き遊泳 ○支援:能登島ダイビングリゾート イルカレクチャー 野生イルカウォッチング ※目の前で見る野生イルカの姿に釘付け ○支援:能登島イルカ保護委員会 夕食準備・後片付け 海萤観察・民宿との交流 ※海萤観察は天候や子どもの疲れ具合に合わせて一部の民宿で実施</p>
<p>3 日 目 (7 月 9 日)</p>	<p>定置網荷捌き見学 えの目漁港で朝どれ魚の荷捌きや定置網漁網について学ぶ ○支援:えの目大敷網 ※魚釣り体験 雨にも負けず夢中 能登島小学校と交流 ※能登島小学校訪問 ドッジビーの対戦 夕食準備・後始末 魚捌き初体験 家へのお土産に持ち帰り 民宿との交流 ※各民宿ごとそれぞれ持ち味を生かす関わり方あり 宿泊者との関係を越えた心と心の交流に子は感動</p>



魚飼育体験
(能登島水族館)

4 日 目 (7 月 10 日)	農業体験（ジャガイモ掘り） 田んぼの学習 ※雨のため室内で話を聞き、田の見学 ○支援：ビオトープ向田 そば打ち体験 ※昼食用のそばを打つ ○支援：生き生き工房ねねの会 能登島スローライフ推進協議会 退島式 ※民宿関係者と別れを惜しむ	
--	---	--

田んぼの学習

事後指導

(1) 俳句作り（国語1時間 5, 6年生各クラス）

「自分の思いを五・七・五に」と感動や記憶が新しいうちにと各学年で取り組んだ。提出された俳句の数やその表現からも、体験が子どもの豊かな心の育成に繋がることが伺えた。これらの俳句は、能登島の皆様に礼状とともに送ったところ、大変喜んでいただくことができた。また、学校でも校内に掲示し、全校に活動の様子や感動を伝えることができた。

(2) 宿泊体験活動報告会

5・6年各クラスで（5年国語2時間 総合2時間 学活1時間）
 （6年総合4時間 学活1時間）

「相手を意識して 書く 話す」という国語科と関連させ、9月の授業参観時に保護者対象の報告会を実施した。体験を通して得た気づきや学びを写真や絵、パワーポイントなどを用いて分かりやすく説明でき、保護者にも好評だった。授業参観後の懇談会では今回の宿泊体験活動に対する保護者の意見も聞くことができた。

(3) 放送体験（5年 社会10時間 総合4時間）

NHK 放送体験では「能登島での宿泊体験」をテーマに番組作りをし、県内に放映された。能登島の方々にも見ていただくことができ、さらに繋がりが深まった。

(4) 「馬場のステキを伝える会」への招待と馬場での交流

「能登島の皆さんのおかげ ありがとう 馬場小にも来てもらいたい」という子どもたちの思いから、創立記念日に行う全校集会に、温かく優しく迎えて下さった能登島の方々を招待した。集会への招待状は6年生が書いた。相手を意識し、文章をしっかりと書くことをねらい、国語科との関連を図った。残念ながら集会はインフルエンザで中止となったがしっかりと準備をすることができた。

社会科で学習した“水産業”を踏まえた漁村生活体験の取り組み

おお やま ざき

大山崎町立大山崎小学校

京都府乙訓郡大山崎町字円明寺小字百々18番地
電話番号 075-956-2366
FAX番号 075-954-5317

全学級数	19学級
全児童数	505名
全教職員数	32名

活動地域と宿泊先

京都府舞鶴市字野原

【受入組織：まいづる野原漁村交流推進協議会】 → 詳細は120ページ

地 域 名	宿 泊 施 設
京都府舞鶴市野原	民宿（4軒）（2泊）

活動のねらい



- (1) 漁村民宿泊による多様な生活体験を通して、自主性・協調性・連帯感を培い、仲間意識を育む。
- (2) 野原漁村特有の体験プログラムを通して、海辺の自然の雄大さや漁業に関わる生活を体感させ、豊かな人間性を育む。
- (3) 野原漁村の人たちとふれあい、一緒に生活をするすることで、その地域を守るために働いている人たちの頑張りや苦勞を感じ取らせる。

取り組み前の課題

- (1) プログラムの開発。晴天のプログラムはたてやすいが、雨天の時のプログラム作りが大変であった。
- (2) 長期の宿泊に向けての学校の支援体制を組むにも人がいない。担任は夜中も起こす児童もあり、3～4時間の睡眠である。
- (3) 地域の特色を生かしたプログラム作りの大変さ。
- (4) 補助の決定しだいで動く不安定な学校行事（前年度からの準備はできなくて、決定後に学校の組織が動くという大変さ）

対象学年・児童数	5年生・88名
実施時期	平成21年6月17日（水）～19日（金）



活動地域の選定で決め手となったポイント

- (1) 本校は京都と大阪の中間に位置する都会であるため、京都府の受け入れ地域の中から日頃なじみの薄い海の体験をさせたかったため。
- (2) 受け入れ体制は未整備であったが、受け入れは充分可能だということであったため。

活動の成果

- (1) 都会ぐらしの児童にとって、海の自然を満喫でき、興味・関心を高めて意欲的に学習することができた。
- (2) 五感を通して自然に関わる時間をもてたこと、ゆったりと過ごせたことがとても、児童にとってよく、自主性の高まりがみられた。
- (3) 海辺の民宿での食事や食体験は、新鮮で豊かなものであり、魚のおいしさを再発見できた。
- (4) その土地の人との関わりがあり、児童も引率の教職員も心が温かくなって帰ってきた。

課題に対する解決策

- (1) 宿泊前後の地元との交流をどうつなげるのか、地域の組織としての支援体制がまだ整備されていない。
- (2) 雨天時のプログラムも細かく考えて準備をして当日を迎えた。6月中旬と言う、时期的にも雨の確率の高いこの時期に、雨天時を想定しないわけにはいかない。島めぐりのように雨天だと絶対に不可能なものがあつた。そうなつた場合、日程を入れ替えるだけでできるものもあればそうではないものもある。雨天時の代替案として、モバイル作りやキャンプファイヤーの代わりにキャンドルファイヤーなどを考えていた。
- (3) 学校の支援体制について。担任と養護教諭は全日程引率をしたが、2泊では学生ボランティアを募り3人が参加し、夜尿の対策などに協力をしてくれた。他の教師にも引率をお願いし、常に6～7人の体制で臨んだ。しかし、全日程を同じメンバーで取り組んでいるわけではなく、意思疎通や申し送りがうまくいかないこともあつた。学校現場からそれだけ多くの教師が抜けることは不可能なこと。保護者からも、民宿ごとに教師がいるということで、なんとか安心してもらえたような実態もあり、これ以上、手薄になると、保護者の賛同は得にくいのではないかと思う。
- (4) 近くに川や山があつても、海の体験がない児童が多い。そのため、できるだけ自然体験の活動（島めぐり・浜辺の清掃活動・漁村のきもだめし等）ができるように考えた。2泊3日という大きな学校行事である。1泊2日の宿泊学習のように取り組みの時間に追われるのではなく、ゆったりと過ごす時間ができるように日程を組む時に、午前・午後と2つの大きな枠で活動内容を構成した。
安全面では、養護教諭の引率で問題があつた。3日間宿泊体験活動の引率で行くために、学校で1人しかいない養護教諭が不在ということになる。この間は学校の教職員で対応をした。次年度は、町の教育委員会から、その期間、保健師の方の派遣予定である。
- (5) 24時間体制で子どもへの指導・対応をしていくことになるので、引率教員に過剰な勤務を強いている。子どもによい体験をさせてやりたくて、工夫を重ねている。
- (6) 4月に新担任が決まつて動くことは同じであるが、決定の時期が遅い。決定したら、町教育委員会からすぐに連絡をもらつて校内体制をつくつていった。

体験活動の実施体制

学校の指導（支援）体制

- (1) 初めての長期体験研修体験であるため、**児童・保護者ともに不安**（2泊への不安、魚が食べられるかとの不安等）を感じる声もあったが、保護者会の説明会を実施し、児童にむけても、説明を行った。
- (2) 今まで1泊2日のところを2泊すること、海に行けるという点で、期待感の方が児童には強かった。
- (3) 引率教員は担任以外は1人しかいないので、**要員の補助として学生ボランティアを募**る。

※本校は「教員養成サポートセミナー実施校」であることから、滋賀大学に対する協力校として滋賀大学に募集をかけた。

配慮事項等（安全確保のための改善点、衛生上の留意点等）

安全確保

- (1) 学校とまいづる野原漁村交流推進協議会とで、**安全確保**（砂浜、磯遊びの場所、民宿の寝室・トイレ、干物作りでの刃物の扱い等）に向けた事前打ち合わせを実施した。
- (2) 事前下見を行い、その後の詳細についてはFAX等で連絡を取り合う。
- (3) **緊急対応時の連絡系統を事前に十分確認**した。
- (4) 体調の管理について、個々にアンケートをとり、**事前の健康状況について養護教諭・担任が把握**をした。

衛生上の留意点

- (1) 食物アレルギー等について事前調査をし、食事のメニュー等の事前調整をした。
- (2) 食中毒に配慮して、**手洗い指導**をし、干物づくりについて指導をした。
- (3) 弁当類については、**事前に腐食の点検を励行**し、残飯処理を行った。



お世話になった舞鶴市野原地区

感想

保護者からの声

- (1) 民宿での生活体験をすることにより、自分から声をかけてお手伝いをしてくれるようになりました。
- (2) 帰ってきてからは、自分のことは自分でする姿勢が身に付きました。
- (3) 2泊も外泊をしたことのない子どもの親は、そのことで不安なことがありましたが、無事終わったことに安堵しました。
- (4) 魚が苦手で、朝と夜は魚がたくさん出たことがとても苦痛に感じていました。
- (5) 家ではほとんど手伝いをしないので、これを機に心を入れ替えて手伝うようになるかと思ったら、そうではありませんでした。



児童からの声

- (1) 今まであまり外で泊まったことが無かったので不安でしたが、友達や民宿の人達と生活することで、不安ではなくなりました。もっと長くいたかったです。
- (2) 班活動では、始めはまとまりがなく、なかなかうまくいかなかったのですが、時間が経つにつれて、協力できるようになってきました。いつもと違うところで生活することによりみんなで協力する大切さに気付きました。



実施までの経過

- 平成21年 2月 校長が「農山漁村におけるふるさと体験推進校」に応募することを決める。
- 3月10日 職員会議で、来年度の5年生の宿泊について、話を行う。
- 4月 6日 新体制の職員会議で日程等の検討にうつる。
文部科学省からの内定を受け取る。
- 4月下旬 決定の通知を受け取るとすぐに、まいづる野原漁村交流推進協議会と連絡をとる。
現地と電話やFAXによる連絡を取り合う。
- 5月 現地の下見、保護者説明会、児童に向けて説明を行う。
- ※2泊で実施の理解促進
 - ※受け入れ地域の写真での紹介
 - ※医療機関、安全・緊急体制の説明
 - ※自然の豊かさ

活動内容

事前指導

(1) 活動の概要説明及び班での役割分担や目標の設定

学校として初めての活動になることを説明し、場所の紹介等をし、活動についての見通しをもたせる。

(2) 活動の内容の紹介と、グループの中での担当の活動を決め、保護者にも理解を図る。

(3) 漁業について社会の学習を通して学ぶ。

(4) 干物づくりに向けて、家庭科の調理実習や家庭への課題学習で包丁の使い方を学ぶ。



旧野原小学校の講堂で入村式



干物づくり



野原漁港水揚げ見学



島巡り



舞鶴産トビウオの給食(事後活動)



大漁旗を背に力いっぱい踊った体育大会
(事後活動)

日程

月日	行程
1 日 目 (6 月 17 日)	<p>午前</p> <ul style="list-style-type: none"> ・移動 (大山崎町→舞鶴市) 観光バス <p>午後</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入村式 野原漁村クイズラリー ・夜の散策
2 日 目 (6 月 18 日)	<p>午前</p> <ul style="list-style-type: none"> ・漁港（水揚げ見学） ・島めぐり (海辺や海底生物の観察) ・浜の掃除 浜辺のクリーン作戦 <p>午後</p> <ul style="list-style-type: none"> ・干物づくり ・小魚釣り <p>夜</p> <ul style="list-style-type: none"> ・野原漁村一周きもだめし ・星の観察
3 日 目 (6 月 19 日)	<p>午前</p> <ul style="list-style-type: none"> ・漁師さんから漁業の話聞く活動 ・大漁なべづくり <p>午後</p> <ul style="list-style-type: none"> ・移動 (舞鶴市～大山崎町)



野原漁村クイズラリー



浜辺のクリーン作戦



漁業の話聞く活動

事後指導

- (1) お世話になった方々へ手紙を書き、自己の成長を振り返る。
- (2) 体育の表現「ソーラン節」を踊り、大漁旗を借りて、思い出をつなぐ。
- (3) 体験活動の発表会を全校集会や保護者の参観日で行う。

少人数校における3年生から6年生までの複数学年による取り組み

つわの きべ 津和野町立木部小学校

島根県鹿足郡津和野町中川424
電話番号 0856-73-0011
FAX番号 0856-73-0018

全学級数	4学級
全児童数	26名
全教職員数	7名

活動地域と宿泊先

島根県隠岐郡西ノ島町・海士町

【受入組織：隠岐島前子育て島協議会】 → 詳細は122ページ

地域名	宿泊施設
島根県隠岐郡西ノ島町	民宿（2泊）
島根県隠岐郡海士町	隠岐自然村

活動のねらい



- (1) 平素より地域の「ひと」「もの」「こと」にふれあいながら進めている本校のふるさと教育の活動との関連を図り、体験しながら学ぶことの楽しさを味わわせる。
- (2) 漁村の生活を五感を通して体験する中で、他の地域にも素晴らしい「ひと」「もの」「こと」があることに気づかせる。
- (3) 漁村の伝統や文化を木部地区のものと比較しながら体験し、児童が目的意識をもった活動を行わせる。また、体験で学んだことを表現する活動を行うことにより感動を深める。
- (4) 「体験活動安全計画」を作成し、児童の保健、安全について最大限の配慮と取り組みを行う。

取り組み前の課題

- (1) 離島での体験活動は天候の影響を受けやすく、悪天候時の活動が変更できるよう弾力的な計画を立てておく必要がある。
- (2) 中学年児童は宿泊研修自体が初めての経験で、発達段階的な課題も多い。
- (3) 移動に要する時間がかかるため、そのことによる児童の健康管理についての課題



活動地域の選定で決め手となったポイント

- (1) 本校とは全く違った自然環境、文化があること。山村に住む子ども達にとってはすべての活動素材が新鮮で、発見や驚きに満ちていた。
 - (2) 県内施設でもあり、現地の町村関係の方だけでなく関係機関の協力が得やすい。
 - (3) 事前視察において、担当者の方が丁寧な対応をしていただき、皆さんが歓迎の意を心温かに伝えてくれた。また、選択可能な多くの活動を準備されていた。
 - (4) 受け入れの中心となる部署と人がはっきりして、責任を持って対応してくれた。
- ※きっかけは、島根県教育委員会から隠岐郡西ノ島町・海士町（隠岐島前子育て島協議会）の受け入れ地域情報を提供されたことによる。

活動の成果

- (1) 漁村の体験は、他の地域の自然や伝統、文化を知るだけでなく、木部で学んできた地域の「ひと、もの、こと」の価値について改めて再認識することになった。
- (2) 活動後、高学年の児童に全校のリーダーとしての意識の高まりが顕著にみられた。体験活動実施前以上に下級生に上手に言葉かけを行い、学校全体をまとめられるようになった。
- (3) 宿泊を重ねるにつれ、児童が互いに励まし合ったり、困ったことについて助け合ったりする場面が多くみられるようになった。学年を越えた仲間意識が高揚していく様子が見られた。
- (4) 学校や家庭の色々な場面で我慢が出来なかった児童が我慢ができるようになり、成長が見られた。
- (5) 本校は小規模校で人間関係が固定化しがちであったが、体験活動を進める中で、話しづらかった児童同士で声をかけあったり、助け合ったりするなど、その関係に改善が見られるようになった。
- (6) 発表会等で学んだことを表現する活動を多く取り入れたことで、体験活動で学んだことを深めるとともに地域の方々にもその成果を伝えることができた。
- (7) 健康安全に対する十分な計画と準備、事前指導を行うことで、すべての体験活動が円滑に行われた。

課題に対する解決策

- (1) 事前調査の段階で、受け入れ側（西ノ島町観光課）に雨天時に可能な活動内容について準備をしていただいた。また、受け入れ諸施設や宿泊所が天候による状況変化にどの程度対応できるかを確認して、複線型の計画を立てた。
- (2) 保護者に具体的な資料をもとに、子ども達の一日の生活や活動について説明する機会を数回もった。また、地域で行われている「通学合宿」とも連携をとり、そのノウハウを生かして集団宿泊活動の指導を行った。
- (3) 陸路については緊急車両を準備して対応する。しかし、遠く離れた離島では、現地医療機関に頼らざるを得ないため、緊急時の対応計画を立て、引率者による事前研修を行った。

対象学年・児童数	3年生・3名, 4年生・6名, 5年生・3名, 6年生・4名, 計16名 ※本校は小規模校であることから普段より縦割り活動が主体。保護者からの要望により、1・2学年では基本的な生活習慣ができあがっていないため、対象から除外。
実施時期	平成20年9月30日(火)～10月3日(金) ※島根県教育委員会は夏季休業中の実施でも可としたが、津和野町教育委員会教育長から「年間の授業日数及び授業時間数が十分に確保されている状況であるので、夏季休業は子ども達の夏休みとして確保すべき」との指導により授業日中の実施とした。

体験活動の実施体制

学校の指導(支援)体制

- (1) 少人数であることの利点を生かし、一人一人の実態に応じた細やかな実施計画を立て実施できた。
- (2) 校長が事前に現地視察を行い、現地担当者と綿密な打ち合わせを行った。

※現地視察のポイント

- ①安全確保の体制
- ②活動責任者の受け入れに対する思い。(組織としてどのように機能しているかの判断基準となる)

配慮事項等(安全確保のための改善点、衛生上の留意点等)

安全確保

- (1) 事前に警察署、消防署へ連絡を取り、活動地域や宿泊場所の安全確保に関する情報を収集し、安全計画作成に生かした。
- (2) 引率職員全員で「宿泊研修安全計画」を作成し研修した。
※時系列に各体験で想定される危険を洗い出す。
→それに対するチェックポイントを表記。→体験活動中の管理の目安とした。
- (3) 緊急事態発生時の対処や救急連絡体制について確認した。

衛生上の留意点

- (1) 家庭より持参する弁当については、残飯の処理を確実にを行った。
- (2) 夜尿症のある児童には保護者と連絡を取り、処置の仕方と指導者への連絡の仕方について事前に指導した。
- (3) 食物アレルギーについては事前アンケートを実施し、結果とお願いを宿泊所へ提出した。

感 想

保護者からの声



- (1) 大変良い活動であったと思う。今後の学校生活や学習面で体験から得たものを生かしてくれるよう願っている。
 - (2) 活動中に漁村の児童との交流ができればよいと思った。
 - (3) 遠足でもなく、旅行でもなく、親と離れての三泊四日という長い期間の体験活動をさせていただいて、子どもたちは一生忘れることにできない思い出ができたと思う。
 - (4) 向こうでの活動の様子が少しでも親に届けば待つ身も楽だと思いました。ちょっと遠くて長かったので。
 - (5) 本校は通学合宿※を体験させて親も子も不安をあまり感じませんでした。経験していない親子は相当に大変だったろうと思います。何事も積み重ねが大切ですね。
 - (6) 体験活動は学習に影響もないので夏休みの方がよいのではないか。
 - (7) 通学合宿と違って学級の全員が参加してできたことの意義が大きいのではないのでしょうか。
- ※ 「通学合宿」：地域の子どもを地域で育てようと平成15年より始まった。地域のボランティアの支援で、希望する児童が木部小学校に隣接する木部公民館で4～5泊し、ここを生活拠点にして通学する。

児童からの声



- (1) 自分が学べたと思ったこと
 - ・台風や不漁など海で暮らす人の大変さがわかった。
 - ・ご飯をみんなで食べる時は食べる時間や片付ける人のことを考えてやるのが大切だということ。
 - ・ローポートのように一人ではできなくてもみんなで力を合わせれば楽しいことができる。
- (2) 友達と長い時間を過ごして新しく発見したことや気付いたこと
 - ・みんなが色々な事をするのに学校よりも素早く動いている。
 - ・六年生がすごく助けてくれて嬉しかった。みんなで力を合わせて活動ができた。
- (3) 体験したことをもとに、これからやってみたいことはありませんか。
 - ・一人でご飯を作ってみたい。お土産のスルメが喜ばれて良かった。
 - ・隠岐に流れ着いていた漂流物と石見地方のものと比べてみたい。
 - ・木部の人たちにも隠岐の自然やすごいことを教えてあげたい。
 - ・低学年の人たちがいけなくて可哀そうなので今度は全校で行ってみたい。
 - ・海洋性スポーツの楽しさをやっていない人に教えてあげたい。
- (4) 帰りのフェリーの中での日記
 - ・ぼくたちは今から木部に帰ります。僕は最初、楽しい気持ちできました。でも色々やってきて楽しいことや陰しく大変なこともありました。そういうことをやっていたら、大変なこともみんなでやれば簡単になるということも学びました。これも隠岐へ来て勉強した成果だと思っています。今日までの四日間、隠岐の人や家族の人、友達、先生みんなありがとう。

実施までの経過

- 平成20年 2月 校内職員会で「農山漁村におけるふるさと生活体験推進校」に応募することを決定。「事業計画（案）」作成
- 4月 7日 校内職員会において、隠岐島前子育て島協議会より送付された資料をもとに計画全般について話し合い。
- 5月15日 児童、保護者、職員への事前アンケートの実施
- 6月10日 計画書を教育委員会へ提出。
- 6月18日 体験活動支援委員会の実施
- 7月12日 現地視察
- 7月15日 保護者説明会の実施

活動内容

事前指導

- (1) みつば会の方と料理を楽しもう～地域の食生活改善推進委員の方と木部地区の郷土料理づくりに取り組みながら、基本的な調理用具の使い方や食材の調理方法等について学んだ。
 - (2) Sさんから海のことを教えてもらおう～危険をとめない、特別な技術を要する海洋性スポーツの予備知識や安全確保のために必要な事柄を、学校支援委員長であるSさんから指導して頂いた。
 - (3) 隠岐チャレドン（チャレンジ&トライの意）体験の計画を立てよう。～体験活動の全体目標を児童全員で話し合っ決めて、それをもとにして個々の目当てを決めた。
 - (4) 活動に対する事前アンケートを実施～「児童」「保護者」「職員」それぞれに対してアンケートを実施して、結果を活動内容に生かした。
- ※「職員」の不安（安全確保や健康維持）と期待（人間関係の新たな発見）を洗い出した。

日 程

月日	行 程
1 日 目 (9 月 30 日)	7:45 学校集合・出発式
	8:00 学校出発
	12:00 バスで昼食弁当
	12:30 境港・水木しげるロード散策
	14:30 フェリー乗船
	17:05 隠岐西ノ島町別府港着・入島式
	18:00 民宿到着・夕食・入浴
	21:00 係、班別会議・反省会
	21:30 消灯
	※すべての体験は、現地の指導者による指導があった。

<p>2 日 目 (10 月 1 日)</p>	<p>6:30 起床 7:00 朝食 8:00 大敷網の見学 9:00 スルメづくり体験 11:00 郷土料理づくり・昼食 14:30 海洋性スポーツ体験 18:05 民宿着・夕食・入浴 21:00 係、班別会議・反省会 21:30 消灯</p>	 <p>スルメづくり体験</p>
<p>3 日 目 (10 月 2 日)</p>	<p>6:30 起床 7:00 朝食 8:10 民宿出発 8:30 別府港到着・フェリー乗船 8:45 海士町菱浦港着 8:50 海中展望船乗船 9:50 入島式 10:20 自然体験村到着 10:30 サザエカレーづくり 13:30 海岸の自然観察と磯釣り体験 17:30 バーベキューづくり・夕食 19:30 民謡体験「キンニャモニャ踊り」 20:40 入浴 21:40 係、班別会議・反省会 21:30 消灯</p>	 <p>民謡体験「キンニャモニャ踊り」</p>
<p>4 日 目 (10 月 3 日)</p>	<p>7:00 起床 7:30 朝食 9:00 自然体験村出発 9:20 菱浦港着・離島式 9:50 フェリー乗船 13:20 境港着 13:30 境港発・バス内で昼食 18:00 学校到着</p>	 <p>海洋性スポーツ体験</p>

事後指導

- (1) 体験活動のまとめをしよう～目当てをもとにした反省や、体験して新たに知ったこと、わかったこと、感じたことなどを個人、全体でまとめた。次に体験毎のグループに分かれ他の人にどのように伝え表現していくかを考え、発表の練習に取り組む。
- (2) 体験活動発表会～学校行事である「木部っ子まつり」(学習発表会)の際に、体験活動でまとめたことを保護者や地域の方々の前で発表した。体験を劇にしたり、学んだ事柄を写真やVTRで紹介したりした。また最後に隠岐民謡を披露した。
※児童の発信力を高めるひとつとなった。